



TITLE:

京大図書館の思い出

AUTHOR(S):

坂上, 英

CITATION:

坂上, 英. 京大図書館の思い出. 静脩 1969, 6(1): 5-6

ISSUE DATE:

1969-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36524>

RIGHT:

一のメリットだと信じている。——かくて、分散している本を、歴訪して利用できるのは嬉しい。

しかし、反面、図書の集中保管の思想を、もっと見直してもよくはなからうか、近年、本館の書庫にあった本草学の文献群が、一つの部局の図書室に移管された。私はこういう分属主義の思想に批判的である。本館にある文学の本を文学科が、哲学の本を哲学科がと分けどりにならぬ事を切に希望する。

本館は、本の撰択購入主体であるべきではない。その事は各研究室に主として委ねられるのがけだし当然である。と同時に、本館は、資料化した書籍の保管には、一層大きな役割りを果たすべきだと思う。

私は、部局から本館の書庫に還流されてくる本があって然るべきだと思う。

本館にせよ部局にせよ、旧書庫とか仮書庫とか名付ける不便な処に、あるいは人がはさみ込まれそうな狭隘な書庫に、迷惑そうに堆積されている図書が存在する事は、大学にとってあまり名誉ではない。これらは、単に部局の書庫や研究室の書棚の拡張によって措置するだけでなく、本館の整然たる大書庫の中に、再分類上架される事によって、その生命を復活するという事も考えられるのではないか。研究室→部局→本館書庫という還流が果されるならば、資料

化した図書の中央集在化が漸進し、とかくに昏迷をつづけているところの、「部局書庫との関連における本館書庫の意義」は確立するであろう。

そのため、およびその他あらゆる事のためには、建築と人員との大予算が必要な事は論をまたない。二十年計画とやらがあるものならば、本館書庫の三倍増計画は是非とも盛り込まなければならない。

図書館では、ちょっとした改善も、直ちにラベルやカードの改訂に結びつくから、莫大な人手を要する事は外部の私にも想像できる。今の還流の思想にも、再分類という手順が必然的に随伴する。しかし、図書館経営の大要は整理学だ。それは、集中・網羅・分類・記述が完備して、始めて大学の中核的臓器となり得るのである。本館のカード作成がいかにか手薄な人員でなされている事か。それは、その責務の大きさに比して、慄然とする程である。本館の職員は大幅に増す必要がある。さもなくば、大学の機能・水準はむしろ低下して行くであろう。そしてこれらの改善は、一に商議員の見識と努力とにかかっている。

理想的な研究室は、大書庫の中にこそあるべきだ。書庫の中に入ったまま、終日外に出ないで仕事ができるシステム、これが私の理想である。いかがなものだろうか。
(教養部助教授)

京大図書館の思い出

坂 上 英

中学生の頃から今日まで、よく利用させてもらった図書室、図書館は十指に余るが、その中で最もお世話になったものは京大図書館である。私が入学した昭和17年頃は、現在の図書館が工事中であったため閲覧室は法経四番教室の上にあった。当時、私は講義が終ってから夕食までの時間を図書館で過ごすことを日課のようにしていたが、これは寸陰を惜んで読書に励んだということではなく、唯単に、一度下宿に帰ってか

らあらためて学生食堂まで足を運ぶのが億劫であるということによるものであった。従って、図書館で過ごす時間は、休んだ講義のノートを埋めるために使ったり、閲覧室の書架に並んでいる全集ものなどを読んだり、また試験が近けば医学書などを読んだり、すごしたわけである。

どんな本をよんだか大方忘れてしまったが、ただ、一回生の頃、読んでいた解剖学の原書の図譜が、数ページにわたって切りと

られているのを発見して、びっくりしたことを今でもはっきりと覚えている。拾数年前ドイツにいたとき、ある大学の医学部に留学していた日本人学生が、本を切りとったということで罪にとわれ、体刊を課されたことが新聞記事になり、留学生一同、図書館へ行くのに肩身のせまい思いをしたことがあったが、学生時代の経験とともに忘れられないこととして記憶にのこっている。

図書館に出入りしているうちに、いつとはなしに図書を大切にすること覚えようになったが、学生時代、夏休みの帰省中に、わが家の蔵書の整理を自らかって出たことがある。富士川游博士の集められた古医書が京大図書館に納められていることを教えられたことも、整理を思い立っ

た動機の一つであった。本草綱目などが並んでいるなかに、特に興味を覚えたもの何冊かを京都へ持ち帰ったが、戦災にもあわず今も手許に残っている。

寛政三年辛亥十一月（1791年）刊行の秘伝眼科全書とか、わが国における西洋眼科書翻訳の最初のものといわれている、文化十二年乙亥季春（1815年）と記された眼科新書などがあるが、何代前かの先祖がもとめてよんだものであろう。これらを読んでみると、先人の苦労のあとがしのばれるとともに、日本の眼科学のはじまりを見出すことが出来、誠に興味深いものがある。

京大図書館に初めて足をふみ入れてから三十年近くたつが、図書に親しむことを教えてもらったことを深く感謝している。

（医学部助教授）

社会科学関係統計資料の学内共同利用を

—経済学部調査資料室より—

細 川 元 雄

数年前、図書の極端な分散配置の現状と図書の専用化傾向を指摘し、図書館の近代化を提起された「京都大学附属図書館報告書」（66年刊）をみれば、今日の図書関係の問題点はあきらかにされていると思う。しかし現場の一資料担当者の当面する問題は、緊急かつ具体的である。経済学部調査資料室の一利用者の声（本誌第5巻第4号）に触発され、この欄を求め、周知の問題をあえて提起した。それは、社会科学関係の統計資料の共同利用を目的に関連部局および研究室間の交流を促進することである。

情報の大量化と研究教育の専門化とに対応しながら、各専門分野での情報管理室を目指している資料室では、絶えず検討を迫るさまざまな問題が生じている。その一つは統計資料であろう。わが国の政府統計に限っても、年間約479種^{（注）}あり、年鑑・要覧等、都道府県単位で出される統計を加えると膨大な量になる。さらに、外国のセンサス類の主要なものとなれば、その収集・整理に今より数倍の人員と予算をさかなければならない。専門研究の要請と人員・予

算の限界にともすれば無力感を抱くのも一資料屋ばかりではないと思う。学部図書室と分離して、経済の現状分析および統計の資料収集を中心に分担してきた当室でも、最近他部局との関係は密接になってきている。昨年10月を例に利用状況をみれば、学部教官・院生は32名、他部局者は14名、学生を含む閲覧者は39名であり、レファレンス状況（10～12月）は24件、うち学部外は11件を占めている。

「もっと専門化に踏切っては」、「いや、もっと広く収集を」。これらの声は、データ・センターやアーカイブの名とともに資料担当者に強く響いてきている。当面、学内の統計資料のすみやかな共同利用について、従来の相互貸借だけでなく、質的な意味を加えて考えてはどうかと思う。それは「調整された専門化方式」とでも言えよう。すでに自然科学関係では進行していると聞いている。また他大学の間で容易に進行しはじめている。学内の社会科学関係の統計利用者と資料担当者の話し合いがはじまってよいのではないか。

（注）中央官庁の昭和42年に実施した統計調査数。

（経済学部助手）